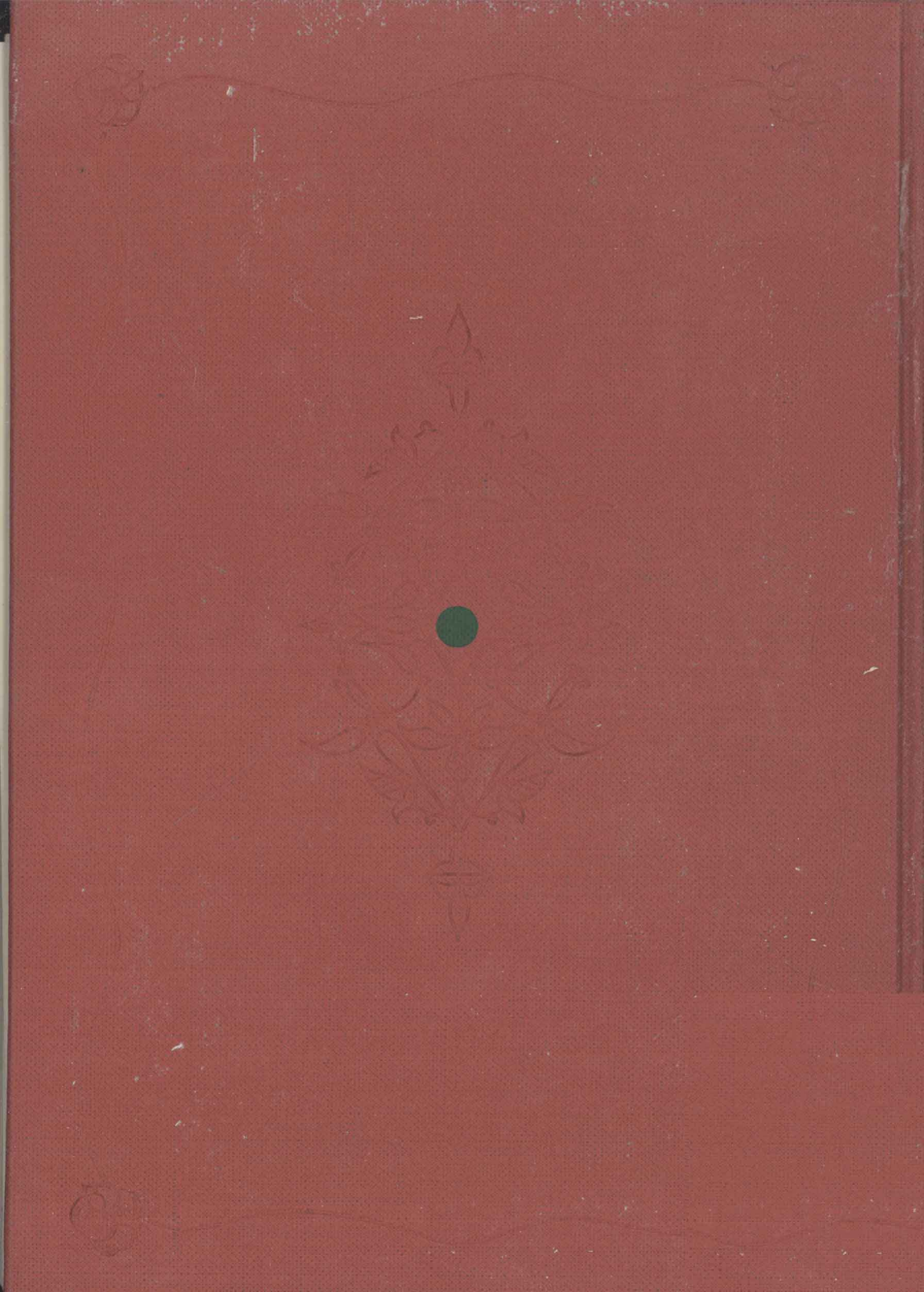




日本古典文學大系
18

源氏物語
五

卅岸
志平
校注

岩波書店刊行

源氏物語五

日本古典文学大系 18

昭和 38 年 4 月 5 日 第 1 刷 発行 ©

定価 800 円



校 注 者 やま し と へ
 山 岸 徳 平

 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3
発 行 者 岩 波 雄 二 郎

 東京都青梅市根ヶ布385
印 刷 者 山 田 一 雄

発 行 所 東京都千代田区 株式 岩 波 書 店
 神田一ツ橋2ノ3 会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

凡例	三
早蕨	九
宿木	三一
東屋	二九
浮舟	一九
蜻蛉	二七五
手習	三七
夢浮橋	四五
補注	四七

付 校

圖 異

五〇九

四九七

凡 例

一、本書は、三条西実隆筆になる青表紙証本を底本とした。いわゆる三条西家証本の親本である。各巻本文冒頭の題名は、底本題箋の文字のままを、活字体として掲げた。

一、本書は、すべて底本に忠実なるを期したが、読解の便を考慮して、左の諸点にだけ手を加えた。

1 本文は正字を用い、歴史的仮名づかいに改めた。底本は、定家仮名づかいや、書写せられた時代の表音的な仮名づかいなどが多く交っている。

2 段落を分けるために改行もし、読解を容易にするために句読点・濁点等を施した。また仮名を漢字に改めて、仮名を振った所もある。従って、その漢字を省き、振り仮名を本文とすれば、大凡底本の姿を再現することができる。

例 阿闍梨あざり 常世とこよ 内宴ないえむ 内裏うち

3 振り仮名の中には、()で囲んだものがある。それは、底本の漢字の読み方に、特別な習慣があるか、または人名や地名などを誤読しないようにと、校注者の付けたものである。

例 四十九日(ななぬか) 卷数(くわんじゆ) 五月(ごつき)

4 底本は、「内裏」の事を「うち」または「内」と記している。「うち」は2の例の如くであるが、「内」の場合は()内に「裏」を補って、「内(裏)」に統一した。この(裏)は、底本にない事を示している。

5 底本の表記を改めたものは、第四冊までの凡例に掲げたものの外、「覚ゆ↓思ゆ」「机丁↓几帳」「両↓領」「古郷↓故郷」「房↓坊」「やむ事なし↓やむごとなし」などである。その他は、頭注でそれを断った。

6 底本の漢字中、語尾の表記されていない動詞には（ ）内に送り仮名を、また名詞には（ ）内に助詞を補ったものがある。ただし、「侍（終止形以外）・思・給・申」は、原則として、（ ）なしに補った。

例 行（く） 思ひ侍（り） 世（の）中 我（が）子

7 底本の「也」「成」「覧」「哉」「劍」「南」などは、断らずに、「なり」「らん」「かな」「けん」「なん」と改めた。

8 底本の「人々」「時々」は「人々」「時々」と改めた。また「きゝ給ふ」に漢字を宛てた時は「聞き給ふ」、「ものゝ」「とのゝ」は「物の」「殿の」とし、「悲しきこと」ゝて」の如く、「で区切られる場合は、「悲しきこと」と改めた。

9 底本の脱字や脱文は、青表紙本系の他本（稀に、七毫源氏など）によって（ ）に入れて補った。

10 会話・独語・消息は別行とし、「」を付した。また、第三者の言葉、または思惟が含まれている場合は、「」『』を用いてこれを区別した。

一、傍注は、主語及び他動詞の目的語、不完全な自動詞の補足語を主とし、接続詞その他の語の若干をも記して、表現面の、適確な理解の便に供することに努めた。傍注は、本文と同じく、歴史的仮名づかいと正字に従った。

一、頭注は、論理的に正確な、表現面の解釈を目標とし、意義学と文法学との面に多くの関心を用い、語釈の適確と、文法の正確とを期した。特に、助動詞と助詞に関しては、その取扱いが粗雑にならぬように留意した。やや廻りくどいと感じられる頭注も、そのためである。主要なものは、補注にも多少述べておいたが、左の如き点に注意した。

1 「ぞ・こそ・なん」などは、多くの場合「どうも・いかにも」の如くに注し、省略しないように考慮した。
2 「けり」は、意識内容の時間、即ち内在時間に関係を持っている。内在時間は、ヤスバースやハイデッガーやワルテル、その他多くの哲学者や心理学者の論究もあり、その機能には分析すべき問題が少くない。補注はそれらの片鱗に触れたに過ぎないが、これを特に「…たっけ」「…たっけなあ(よ)」の如くに注した所もある。

3 接続助詞「て」の機能は補注に述べた如く、原因と接続の場合とを区別した。

4 格助詞「の」「が」の、指定格となっているものは、補注にも多少触れたが、頭注にはそれぞれ断っておいた。

5 他動詞の目的語、及び不完全自動詞の補足語に対する敬語に就いては、補注に多少触れたが、頭注にも断っておいた。目的語及び補足語の省略せられている場合が多いから、敬語の処置に惑わないためである。

6 自発即ち自然的可能の助動詞に関しても、頭注にそれぞれ断っておいた。

7 仮想の機能の「む」に関しても、頭注にそれぞれ断っておいた。

8 格助詞「を」は、時により「…に對して」と注した。新古今集序の「いその上古き跡を恥づといへども」の「を」の類である。

9 その他、「連用修飾語」と「伝聞推測」という術語は、頭注中には用いなかった。

一、頭注には、一項目中に、二項目にわたるものの同居した部分が若干存在する。それは、見開き二頁に收容する必要上、その頁の項目数に従って、止むを得ず生じたものである。しかし、傍注と相まって、正確平易な読解に役立つようには努めた。頭注・補注は、現代仮名づかい・新字体を用いた。各節の初めに、その節の要旨をゴシックで示した。一、頭注や補注には、青表紙本諸本のほか、河内本や別本(伝阿仏尼筆本)の文を掲げて、読解の参考に供した所もある。

目、二、三、四は、それぞれ、第一冊、第二冊、第三冊、第四冊を示す。

一、補注は、頭注に收容し得なかった部分を、適宜に転置したもの、及び本文の理解に参考になると思われるものを掲げた。ただし、頁数の関係もあり、割愛した物も少くない。

一、付図は、本文の理解を助けるため、必要と認められるものを、由緒あるものから、それぞれ選出した。文法と語義と有職故実に通ずることは、解釈に不可欠な事である。

一、校異には、この底本を基礎とし、湖月抄の本文以下、左の如き諸本との対校を表示した。

1 湖月抄本

2 吉田(幸一氏)本

3 穂久邇文庫本

4 蓬左文庫(尾張徳川家)本

5 書陵部本(後陽成帝宸筆を含む)

6 山岸(三条西公条)本

右は、いずれも江戸初期以前の書写にかかる。校訂に用いた原本は、どれも鎌倉期から足利期の写本で、青表紙本としては、特に善本と認むべきものである。青表紙本には、江戸初期またはそれ以前のものとして、まだ、尾張徳川家蔵の里村紹巴筆本、智仁親王筆本や、京都府立図書館蔵の烏丸光広筆本や、嵯峨の大覚寺蔵本など、各所に存在する。然し、対校に当っては、量よりも質を重視して、右の如き江戸初期以前の書写本中、由緒ある範囲の一部に止めた。限られた紙面では止むを得ず、また同系でも玉石混合は無意味な故である。

一、校異の表は、本文研究上、重要と思われる項目だけを掲出し、紙数の関係上、大部分を割愛した。精細な表は、他日別に綜合して世に問う心算である。

源
氏
物
語

早^さ

蕨^{わらび}

梗概と系図

書名 春の頃、山の阿闍梨から中君に、「歳・つくぐし、をかしき籠に入れ」て贈って来た。その時、阿闍梨の歌に「君にとてあまたの春をつみしかば常を忘れぬ初わらびなり」とあった。中君は、それに対して今は、父八宮は勿論、姉大君も亡いので、「この春はたれにか見せむ亡き人のかたみにつめる峰のさわらび」と返歌した。「さわらび」は、中君の歌の中だけしかないが、これらの詞や歌によっている。

期間 薫二十五歳の正月から二月まで。

明石中宮：四十四歳 中君：二十五歳 匂宮：二十六歳 夕霧：五十一歳

内容 中君の最近の心情と生活の転機、及び中君の京に移った事と、その影響である。

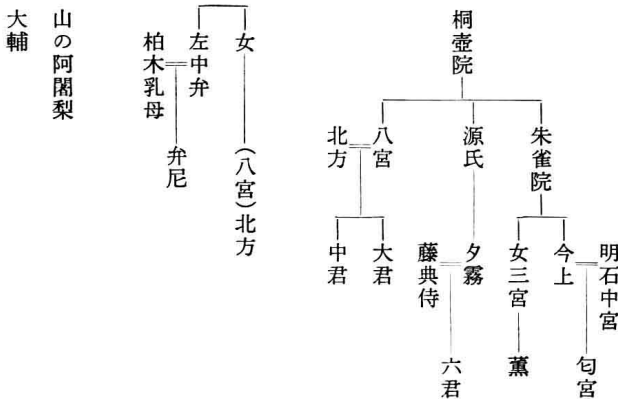
1 中君の生活は、春が帰って来ても寂しかった。そんな時は、大君が慕わしく思い出される。その頃、山の阿闍梨が、早歳や土筆を贈って中君を慰問した。宇治の人々は、大君を追憶し、大君に対する薫の心情が深刻であった事を思っ、薫の親切を痛感する。

2 薫は、匂宮を訪ねて、宇治の物語をした。匂宮は、薫と中君との間を疑って、梅の花の和歌の贈答をしたり、大君の思出や打解けた話で、夜が更けて行った。匂宮は、その際、中君を京に移す事を薫に語った。

3 中君は、二条院に移る事に定まった。引越の準備万端は、薫が取計らった。二月六日の早朝、薫は中君を訪ね、弁尼にも逢った。中君には、強いて面接して話した。中君は、引越に積極的な意思はない。弁尼は、宇治に残る事となった。残った女房達の事を、薫は、自分の荘園の者どもに頼んだ。弁尼と、世間の無常をしみじみと語って、薫は京に帰った。

4 二月七日の夕月夜に、中君は宇治を離れて、匂宮の二条院に移った。匂宮は喜んで迎えた。薫の失望は言うまでもなく大きい。

5 夕霧は、六君の裳着の式を盛大に行った。その婿にと、かねてから匂宮を目ざしていた。然るに、中君引越の一件で、それが失敗したので、薫を婿にと考え直した。けれども、薫にはその気がない。ましてや、失望のこの頃、六君などを考える、心の余裕は全くない。薫は、二条院に中君を訪ねて行く。それに対して、匂宮には、不安が消えない。



一春の光は、草木や竹の藪をも、格別に差別しないで、限なく照らすから、宇治の山荘に。↓補注一。二姉に死別してこんな寂しい境遇で、死にもせず。三移り変わる季節季節につけて。四ちょっとしたつまらない事(歌)に対しても、姉妹で、上(本)の句と下(末)の句を引き受けて、互に詠みあい。一人が上句を詠めば、他は下句を詠む。古歌の本末即ち上句下句を言いあうのではないであろう。五心寂しい、憂き世の。六面白い事に對しても、しみじみと悲しい条件に對しても、誰一人、話した所で、聞いてわかる人もないにつけて、中君は、何事も万事、晴れ晴れせず暗い氣持であり、自分一人で心を碎い(痛め)て。下の「惑はれ給へど」に続く。セよほど(や)まさって、一段と姉大君が恋しく、また寂しいために。

八月日の経過するの知らず、途方に暮れずにはいらねえならいけれども、人が、この世に生きていねえの間の(壽命)は、定業(じやうごふ)と言つて限度(天命)がある事なのであったから。九折柄、山の阿闍梨の許から消息があつて。一〇新年になつてまあ、身辺に、どんな事(御変り)が、御ありなされるであらうか。(御変りなく御機嫌よい事でござりましょう。)長命無事の御祈禱は。

二「氣にかけて(一所懸命に)仏に祈念し申し上げておりまする」など中君に申して、蕨やつくしを。

一「わらはべ」は堂童子で、寺院に仕え読經の僧のために雑役を勤める召使で、年長者の場合もある。↓補注二。二恭敬の心で、仏法僧の三宝

さわらび

藪しわかねば、春の光を見給ふにつけても、「いかで、かく、ながらへにける月日ならむ」と、夢のやうにのみ、おぼえ給ふ。行きかふ時々に従ひ、花・鳥の色をも音をも、おなじ心に、おき臥し見つゝ、はかなき事を、本末をとりて言ひかはし、心細き、世の憂さもつらさも、うち語らひ合はせ聞えしにこそ、なぐさむ方もありしか。をかき事、あはれなるふしをも、聞き知る人もなきまゝに、よろづかきくらし、心一つをくだきて、宮のおはしまさずなりに悲しさよりも、やゝ、うちまさりて、戀しく、わびしきに、「いかにせむ」と、明け暮(れ)も知らず、惑はれ給へど、世にとまるべき程は、限(り)あるわざなりければ、死なれぬもあさまし。阿闍梨のもとより、阿闍梨文「年改まりては、何事かおはしますらむ。御祈りは、たゆみなく仕うまつり侍り。今は、ひとゝころの御事をなん、安からず、念じ聞えさする」など、きこえて、蕨・つくづくし、をかき籠に入(れ)て、

に、物を献納する事を、供養と言う。↓補注三。
 三神仏に奉る何物でも、すべて、初穂と言う。
 ↓補注四。四殊更らしく、いかにも本文に続けず、本文と間隔を置いて(または別行に)書いてある。その歌は即ち。↓補注五。五御身(中君)にと考えてさし上げます。(父八宮御在世の頃から幾年も、毎年、春になる度に、かつては摘んで(父宮に)さし上げたから、父宮が居まなくとも、本年も、常の佳例を忘れない、初蔵である。「君にとて」は「常を忘れぬ」初わらびにかかると。「あまたの春をつみしかば」を「君にとて」の上に倒置する。「つみ」は「積み」と「摘み」を掛けた。六この歌を、御読み申しあげ(披露)なされて下されませよ。七(歌など、平素は詠まないから)一大事と思案して、(二所懸命に詠み出したのであらう。八(苦吟してひねり出した事)も歌の趣旨意味)も、共に心に深く感動するので。下の「(こよなく)目とまりて」に続く。九「よい加減であり、私(中君)を、それ程、熱心にも御思いなさらない(真実でなく薄情の)ようである」と、自然に思われる言葉を。一〇立派に、私の氣に入るように、消息に書き尽くされた。二(父宮が他界なされた、山寺の峰の蔵であるから、姉君と一緒に、父宮の形見と、今までは見たけれども)姉君の亡い今年の春は、誰に見せようか、御身(阿闍梨が、亡き人(父宮)の形見として摘んだ峰のさわらびを。「さわらび」は、蔵が芽を延ばした時の称。「かたみ」に「筐」を掛けた。巻名は、この歌から出た。三阿闍梨の使者に、祝儀を御取らせ(与え)なされる。「三つやつやとした美しさの、豊かに御ありなされる人(の)、色々(姉との死別、勾宮の冷淡などの御心配のために。四あてやかな様子が、前よりも勝れ、

阿闍梨文「これは、わらはべの供養^{くやう}じて侍る初穂^{はつほ}なり」
 とて、たてまつれり。手は、いと悪^あしくて、歌は、わざとがましく、ひき放ちてぞ、書きたる。^(女房へは)

阿闍梨文「君にとてあまたの春をつみしかば常^{つね}を忘(れ)ぬ初わらびなり」
 御前に、よみ申さしめ給へ」
 阿闍梨が七

とあり。大事と思ひまはして、詠み出だしつらむ」と、おぼせば、歌の心ばへも、いと、あはれにて、「なほざりに、さしも思さぬなめり」と、見ゆる言の葉を、めでたく好ましげに、書き盡くし給へる、人の御文よりは、こよなく目と(ま)りて、涙もこぼるれば、返事、書かせ給ふ。^{(女房に)かへりごと}

中君二この春はたれにか見せむ亡き人のかたみにつめる峯のさわらび^{つみ}
 使に祿^{ろく}とらせさせ給ふ。いと、さかりに、句多くおはする人の、さまの御物思ひに、少し、うち面やせ給へる、いと、あてに、なまめかしき氣色まさりて、むかし人にもおぼえ給へり。ならば給へりし折は、とりくにて、更に、似給へりとも、見えざりしを、うち忘(れ)ては、ふと、「それか」と、思ゆるまで、かよひ給へるを、^(大君他界を)

女房「中納言殿の、」からをだに、とめて、見たてまつる物ならましかば」と、^(大君の二七) ^(後に) ^(嬉しからまし)

しかも(て)、大君普の人)にも似て御ありなされた。(五)それぞれ別で。(六)「大君(それ)か」と、ひょいと、自然に思われる程、似通いなされたから。弁尼などか思うのである。(七)せめて亡きがらだけでも。(四)四六三頁(総角)に「虫のからのやうにても云々」とあった。(六)「大君・中君の、どちらが薫に嫁いでも」同じ事であるならば、どうしてこの中君が、(薫の北方として)世話せられ申しなされる御宿縁でないのであつたであらうかなあ。(九)あの薫の御殿の人が、山荘の女房の許に通つて来る機会に。三「際限もなくぼんやりと、放心状態に御になりなされて、新年であるのも構わず、薫は泣いて涙勝ちな目に。三(薫の御殿の人が若い女房などに語る通り)大君への思慕は、なる程、薫のその場限りの浅慮では。三いかに、今になつて、一層、薫の情愛も。三窮屈であり、また実行しづらい(容易ではない) 2 薫と匂宮とから。三正月の二十一・二十二 薫と匂宮と二・二十三日頃の子の日、仁寿 の和歌の贈答殿に文人を召して内々に行われる宴。三二八〇頁(紅葉賀)・四〇三頁(實木)参照。三補注六。三一心一つに持てあまして大君の事をまあと。三御思いあまつて当惑して。三ぼんやり、じつと物を見つめなされて、端(廂)の間に近く。(例の如く愛玩して御ありなされる時。下の「折をかしう思して」に続く。↓補注七。元その紅梅の、まだ咲き出さない下枝を押し折つて。

三折る人(薫)の心に似通うている花なのであらうか、紅梅(薫)は、表面には咲き出さないで、裏面(内)に香を包んで(中君を手に入れている)であつた。薫が宇治に通うので、匂宮は、薫と中君との間を疑っているのであつた。

朝夕に、戀ひ聞え給ふめるに」

女房「おなじくは、見えたてまつり給ふ、御宿世ならざりけむよ」

と、見たてまつる人々は、口惜しがる。かの、御あたりの人の、かよひくる便

に、御有様は、たえず聞(き)かはし給ひけり。盡きせず思ひほれ給ひて、新し

き年ともいはず、いや目になむ、なり給へる」と、聞き給ひても、げに、うち

つけの心浅さには、物し給はざりけり」と、いと、今ぞ、あはれも、深く思

ひ知らるゝ。宮は、おはします事の、いと、所狭く、ありがたければ、「京にわ

たし聞えむ」と、思したちになり。

内宴など、物騒がしき頃過ぐして、中納言の君、「心にあまることをも、又、

誰にかは語らはむ」と、思し侘びて、兵部卿の宮の御方に、参り給へり。しめ

やかなる夕暮なれば、宮、うちながめ給ひて、端近くぞ、おはしましける。筆

の御こと掻き鳴らしつゝ、例の、御心寄せなる梅の香を、めでおはする、しづ

枝を、おし折(り)て、まゐり給へる匂の、いと、艶にめでたきを、折をかしう

思して、

折(る)人の心にかよふ花なれや色には出でず下に匂へる

と、のたまへば、

一眺めてゐる者(薫)に、言いがかりを寄せつけるのであった花の枝(中君)を、いかにも、その積りで、私は当然、折(手)に入れるべきなのであった。「かごと」に「香」を掛け、「花の枝」を中君に譬えた。二(その邪推はどうも、厄介な(困)た)事でござる。三戯れ言(冗談)を言いたいなされるのであった様子は、四しんみりとした御話などになって来ては、大君没後のあの、五大君の亡くなつてしまつた事が、残り多く悲しい事や、大君の亡くなつた、その当時から今日まで、追慕の思が消えないわけを、何かの季節とか場合につけて、しみじみと悲しく寂しくも、六好色(多情)のようで、涙脆いのである、御性癖であるからには、自分の身の上は勿論、他人(薫)の御身の上話にさえ。↓補注八。七いかにも、話し甲斐のあるように、座をとりもって、薫に應對し(受け答え)申しなされるようである。八(匂宮が同情の涙を流された通り)なる程、いかにも、薫への同情を知っている風に。九大層寒そうであり、(隙間の風のために)御燈火も消えたままで、闇の中は、(梅の香も兩人の身の香も隠れないが)物の判別(御互の)顔もわからない覚束なさであるけれども。↓補注九。二兩人は互に、中途で当然聞きやめなされるような事もなく、その尽きる事をしない御話を、気が晴れてしまふまでなさる事が出来なくて。二世間に類例が存在し難いの(まだ潔白)であつた、御身(薫)と大君の間の親睦さであるな。↓補注一〇。三さあ、たとい、そう(大君との間が潔白)であつたと言っても、そう(潔白)でばかりはないのであつたであらう。三薫の話に、言いつ残りがありそう(隠しだしてしているよう)に、あえて御質問なされるのは、いかにも、匂宮の、(自分の事で人を判定する)困つた御性癖

薫「みる人にかごと寄せける花の枝を心してこそ折るべかりけれ
わづらはしく」

「匂に三」と、たはぶれかはし給へる、いと、よき御あはひなり。こまやかなる御物語どもになりては、かの、山ざとの御事をぞ、まづは、

匂「なりにけん」

と、宮は、聞え給ふ。中納言も、過ぎにしかたの、飽かず悲しき事、そのかみ

より今日まで、思ひの絶えぬよし、折／＼につけて、あはれにも、をかしうも、

「泣きみ笑ひみ」とか、言ふやうに、聞え出(で)給ふに、まして、さばかり色

めかしう、涙もろなる御癖は、人の御うへにてさへ、袖もしげる許になりて、

かひ／＼しくぞ、あひしらひ聞え給ふめる。空の氣色もまた、げにぞ、あはれ

知り顔に霞み渡れる。夜になりて、烈しう吹(き)出づる風の氣色、まだ冬めき

て、いと寒げに、御殿油も、きえつゝ、闇はあやなきたど／＼しなれど、か

たみに、聞きさし給ふべくもあらず、盡させぬ御物語を、え晴けやり給はで、

夜もいたう更けぬ。

匂世に、ためしあり難かりける、中の睦びを。いで、さりととも、さのみはあ

らざりけむ」